

1 取り上げる人権課題「外国人」

2 取り上げた人権課題の背景と現状

今日、我が国に入国する外国人は増加しており、平成 26 年には 1,415 万人（再入国者を含む。）で過去最高となっている。しかし、日本では、「大和民族が人口の大多数を占める『一民族、一国家、一言語の日本』である」という主張が政界や言論界で時折見られたり、島国であるという地理的条件や鎖国を行ってきたという歴史的背景があったりする。そうしたものが要因となって生じる社会的均一性が、外国人であることを理由にしたアパートへの入居や公衆浴場での入浴拒否等といった日本における外国人差別の背景となっている。

子ども達においても、英語の授業で EF などの身近な外国人と関わってはいるものの、普段の姿から、児童の中に無意識的に潜在している均一性や異質感が見られる。今後、外国人に対する偏見や差別をなくしていくため、身体面や文化面での多様性を受け入れ、外国人の生活習慣等を理解・尊重するとともに、お互いの人権に配慮した行動をとろうとする態度を育てていきたい。

3 児童の実態

【アンケート調査等からみた本学級の実態】

〈分析の観点〉	〈割合〉
・外国人に対しても、日本人と同じように接している。	約 90%
・自分と違う特徴をもった人のことをおかしいと思う。	約 30%
・塗り絵の際に、パールオレンジを用いて顔を塗る。	約 100%

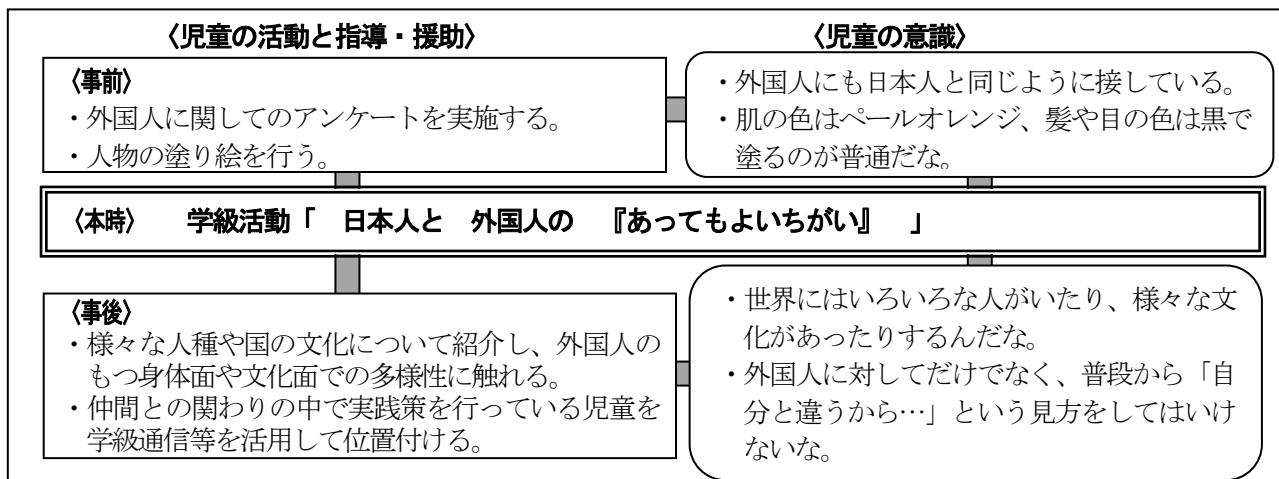
上記の結果より、本学級の児童の多くは「外国人に対しても、日本人と同じように接している」と考えていることが明らかになった。その要因として、EF や本学級に在籍する外国籍の S 児と日常的に関わっており、外国人を身近なものとしてとらえていることが考えられる。また、「自分と違う特徴をもった人のことはおかしいと思う」のが少数であるのに対し、塗り絵の際に多くの児童がパールオレンジを用いて肌を塗るというように、無意識的に「自分と同じであることが一般的である」と考えていることが分かる。

そこで、本題材では、日本人と外国人では身体的特徴や文化的特徴に違いがある場合があることを理解させ、「自分と同じであることが一般的である」というものの見方は視野の狭い見方であることに気付かせたい。その上で、今後、外国人と関わる際に、外国人のもつ身体面や文化面での多様性を受け入れ、正しく行動しようとする態度を育てていきたい。

4 指導改善の手立て

- ・外国人のもつ身体面や文化面での多様性をとらえることができるようにするための【ちがいがカード】の提示
- ・「確かにする場」において、自分の仲間の無意識的な均一性や異質感といった差別意識に気付くことができるようにするため問いかけ

5 事前・本時・事後の指導構想



6 本時の目標

日本人と外国人の「あってもよいちがいに」を考えることを通して、日本人と外国人とでは、身体的特徴や文化的特徴に違いがある場合があることを理解し、外国人に対する偏見や差別をなくし、みんなが安心して生活を送るために、身体面や文化面での多様性を受け入れ、その人の内面や事実を正しく見て接していこうとする態度を育むことができる。(思考・判断・実践)

7 本時の展開

選	主な学習活動	見届ける視点(◇)と指導・援助						
つかむ 10分	<p>1 <第1資料>『自分たちが塗った顔』と『先生が塗った顔』を比べて気付いたことを交流する。</p> <p>・先生が塗ったのは茶色くておかしいよ。 ・そんな色をしているなんて変だよ。 ・ぼくたちの肌の色はペールオレンジだから…。 ・顔は肌色で塗るのが普通だから…。</p> <p>世界には、ぼくたちと肌の色が違う人もいるんだなあ。</p> <p>日本人と外国人の「あってもよいちがいに」について考えよう。</p>	<p>◇肌の色はこうあるべきだという見方で色塗りをしていた自分を振り返っているか。 (つぶやき・発言内容)</p> <p>・オリンピック 100m走男子決勝の写真を提示し、世界には、いろいろな肌の色の人がいることに気付くことができるようにする。</p> <p>◇日本人と外国人には身体的な違いや文化的な違いがあることに目を向けているか。 (活動の様子・発言内容)</p>						
見 い だ す 10分	<p>2 【ちがいカード】の中から「あってもよいちがいに」を考える。</p> <table border="1" data-bbox="263 929 1029 1176"> <tr> <td>①日本でわざわざこははいを意味するが、ブルカアでは「いいえ」を意味する</td> <td>②アートを日本のAくんは「薙毛」で描いたが外国人のBくんは「剃毛」で描いた</td> <td>③日本人のAさんの目の色は黒がアメリカ人のBさんの目の色は青い</td> </tr> <tr> <td>④フィリピン人のAくんは素手で飯食すが、日本のBくんは箸で食べる</td> <td>⑤同じ仕事をして日本のAくんの給料20万円が、外国人のBくんの給料10万円</td> <td>⑥日本人のAさんは学校友達仲良くしているが外国人のBさんはいじめられている</td> </tr> </table> <p>・①、③、④は「あってもよいちがいに」なんだね。 ・日本人と外国人とでは、体や生活の仕方に違いがあるんだね。</p> <p>【確かにする場】</p>	①日本でわざわざこははいを意味するが、ブルカアでは「いいえ」を意味する	②アートを日本のAくんは「薙毛」で描いたが外国人のBくんは「剃毛」で描いた	③日本人のAさんの目の色は黒がアメリカ人のBさんの目の色は青い	④フィリピン人のAくんは素手で飯食すが、日本のBくんは箸で食べる	⑤同じ仕事をして日本のAくんの給料20万円が、外国人のBくんの給料10万円	⑥日本人のAさんは学校友達仲良くしているが外国人のBさんはいじめられている	<p>◇第2資料を基にして、外国人差別の根絶について考えているか。(つぶやき・発言内容)</p> <p>・宮本エリアナさんの話を基に、自分と違うことを理由に差別を受けることで傷つくことに共感できるようにする。</p>
①日本でわざわざこははいを意味するが、ブルカアでは「いいえ」を意味する	②アートを日本のAくんは「薙毛」で描いたが外国人のBくんは「剃毛」で描いた	③日本人のAさんの目の色は黒がアメリカ人のBさんの目の色は青い						
④フィリピン人のAくんは素手で飯食すが、日本のBくんは箸で食べる	⑤同じ仕事をして日本のAくんの給料20万円が、外国人のBくんの給料10万円	⑥日本人のAさんは学校友達仲良くしているが外国人のBさんはいじめられている						
確 か に す る 15分	<p>3 <第2資料>宮本エリアナさんの話から、肌の色を理由にいじめを受けた人の思いを知る。</p> <div data-bbox="247 1332 1029 1556"> <p>エリアナさんの写真</p> <p>わたしは、小学生のときに肌の色がみんなと違うという理由でゴミを投げつけられて笑われたり、知らんぷりされたりしました。また、「色が移る」と言われて遠足や体育の時間に手をつないでくれませんでした。「色が黒くて不潔だから、一緒にプールに入らないで」と言われたこともあります。そんなときには、「もう学校に行きたくない。」と思いました。</p> </div> <p>・肌の色の違いは「あってもよいちがいに」のはずなのに、それで差別するのはおかしい。</p> <p>みんなが始めに茶色い肌の人を「おかしい」って言っていたのはなぜだろう？</p> <p>・わたしたちの中にも、自分と違う人を「おかしい」と思う心があるんだ…。 ・「自分と違うから…」という理由で差別をすると、相手を傷つけてしまう。 ・これからは、その子のよさやがんばりを見て声をかけたい。</p> <p>「自分と違うから…」と違って差別するのではなく、その人のよさやがんばりを見て接することが大切</p>	<p>【人権教育の観点】</p> <p>自らの均一性や異質感に気付く、身体面や文化面での多様性を受け入れ、正しく行動しようとする態度を育む。(行動力)</p> <p><そのための手立て></p> <p>・3の活動で自らの差別意識に気付かせた上で、そうした見方・考え方を克服するために何が出来るかを具体的に考えることができるようにする。</p>						
で き る 10分	<p>【学習成立を見届ける場】</p> <p>4 身近な仲間に対してどんなことを大切にして接していきたいか、実践策を考える。</p> <p>・今までは、自分と違ってあまりしゃべらない子のことをおかしいと思っていたけれど、これからはその子が少しでも話してきたら、がんばったねって声をかけたい。</p>	<p>【評価規準】</p> <p>◇日本人と外国人とでは、身体的特徴や文化的特徴に違いがある場合があることを理解し、その上で身近な人と関わる場面において、そうした多様性を受け入れようとしている。(記述内容)</p>						

解 説

1. 人権課題「外国人の人権」を取り上げるにあたって

わが国は、外国との人的及び物的交流が飛躍的に拡大しています。わが国に入国する外国人は、1969万人（2015年、再入国者を含む）で過去最高となり、多様な文化が共存する多文化共生社会が進んでいます。しかし、外国人であることを理由に、アパートへの入居や公衆浴場での入浴を拒否されたり、外国人を排斥する趣旨の言動が公然とされたりする事案が発生しています。また、わが国の歴史的経緯に由来する在日韓国人・朝鮮人をめぐる問題もあります。

このような外国人に対する差別・偏見をなくしていくために、身体面や文化面での多様性を受け入れ、お互いを理解・尊重していく態度を育んでいくことが必要となっています。

2. 本実践の指導上のポイント

本実践を進めるために、「自分と同じであることが一般的である」と考えて「自分と違う特徴をもった人のことをおかしいと思う」という意識をもっているということに気付かなくてはなりません。実際に顔の塗り絵をさせたり、「ちがいカード」を用いたりすることで、肌の色をはじめとして、自分たちも一方的な見方をしていたことに気付かせるようにしています。

自己啓発力を育てる手立てとして、宮本エリアナさんの話を用いています。宮本さんの辛かった体験を通して、「あってもよい違い（肌の色）を理由に差別をすると相手を傷つけることになってしまう」ということに気付かせ、偏った見方をしないようにしていこうという思いをもたせるようにしています。